

5 ま と め

1) 山形県における組合式箱形石棺の分類と年代

組合せ式箱形石棺を形態分類する要素としては、掘り方(基壇)、側壁、棺床、蓋石の各細部状況、大きさ(計測値)とその構築状況が基準となる。

山形県内では、これまでに村山地方を中心として38古墳、約100基の組合せ式箱形石棺の発見が知られているものの、大半は正確な記録を残すものはない。

特に石棺設営の基本となる掘り方(基壇)の存在を残すものは山形市大の越古墳、戸塚山137号墳村山市河島山古墳のみであり、参考とならない。またこれまで検出されている(偶然発見されたものが多い)石棺は薄葬が多く、年代を探る手掛りは発見例の多数にもかかわらず比較的少ないと言えよう。こういった現状をふまえると難しいが、戸塚山137号墳の年代を把握するためにも、現段階でまとめてみたい。

2) 分 類

ここでは、県内から検出された組合せ式箱形石棺(以下石棺とする)のうち、形状、計測等の記録が判る、14古墳、25基に限って検討してみる。分類に当り、石棺の名称を次の様に統一した

石棺の長い部分の壁面を『側壁』、短い壁面を『端壁』(両端壁)、石棺の床を『棺床』とし棺床に板石や、円礫を敷つめたものを『有底床』、そうでないものを『無礫床』と、さらに蓋石については一枚石を『単石蓋』、数枚の石を組み合わせたものは『複石蓋』とそれぞれ仮称した。

25基の石棺を形態的な特徴から細分すると次の10型に細別することが可能である。

戸塚山137号型

今回調査を実施した戸塚山137号を基本とするもので戸塚山137号型とする。大型の石材を側壁に2枚、両端に各1枚を組合せた石棺で、端の1方を袖状に張り出すのを特徴としている。棺床は板石を用いた有底床で、さらに細石を詰めている。蓋石は一枚石の単石蓋となっている。同じ形態を示すものは存在しないが、近いものとしてお花山1号墳がある。

大の越2号型

大の越古墳の2号棺に代表されるもので比較的薄い板石を側壁に配し、全体に細長い長方形プランを呈す。側壁は左右対象に3枚を基本とし、接合間に板石をさらに重ねる方法をとっている。両端の壁は一方が二枚、反対側が一枚を有するのが特徴で、二枚板をもつ内面側板石が側壁よりはみ出す。棺床は地山を整地した無礫床で、蓋石は複石蓋である。本墳外に類例はない。

大の越1号型

同じ大の越古墳から確認された石棺であり、2号石棺の上部から検出され、年代的にも2号棺より新しい、形態は基本的に同じであるが、棺床に扁平な板石を敷いた有底床と変化を示し、側

壁も間接石から二重側壁となっている。前者の2号棺は長径282 cmに対し1号棺は推定160 cmと小規模に縮小する特徴がみられた。蓋は同じ複石蓋である。本墳のみである。

土矢倉1号型

二重側壁をもつ大形石棺で内壁に縦長柱状石材を側壁、両端に配する特異な構造をもち、外部にさらに大形石材を有している。棺床は有礫床形状をなし、構造上は大の越1号棺に類似する。蓋石は複石蓋を有するものの、半分は一枚石で覆うことから単石蓋の要素をもつ、本類に属するものは本古墳のみである。

去手呂2号型

4枚～5枚位の石材端を重ねる様に側壁を構築する特徴をもち、両端壁を一枚石で作り上げている。両端壁は、大の越2号型にみられる様な一端を側壁から張り出す形態をとっており、対壁は幾分すばまる。棺床は板石による有礫床をもち、蓋石は長方形板石を側石と同様に重ねる複石蓋をなす。

同形プランをもつものとして去手呂2号墳を始め谷柏1号墳、同2号墳があり、大きさが長径176～215 cm位と2 m単位を有するものが多い。

根際型

薄手の板石3枚を基本とした側壁と1枚の端壁とで構成するグループである。側壁はほぼ一直線に配し、全体的には正長方形に近い。棺床は無礫床が多く、蓋石は4～6枚位の複石蓋を用いる。根際古墳石棺を標準として、谷柏5号墳、同15号墳等があり比較的新しい時期に多く存在するものと考えられる。規模は160～180 cm位の最長径をもつものが多い。

高原型

根際型に類似する特徴をもつが、側壁に用いられる石材が、根際に比べ厚味を帯びた縦長材を7～10個位を直立させる方法をとる。根際は横長板石を利用する関係で3枚を基本とし、高原型は縦長石材を多数使用する点が異なり、また大きさも最長径が175～235 cmと根際に大型石棺が多い。棺床は無礫床が多く、蓋は6～9枚程の複石蓋をなす。

高原古墳を代表に、高瀬山古墳、河島山古墳に採用されている。

谷柏3号型

3枚の板石材を側壁とし、端壁の1部をすばませるのを特徴とする。蓋石は4～6枚位の複石蓋で、棺床は扁平な有礫を示すものと、無礫床を示すものの二者がある。

谷柏3号墳と同14号墳にみられる。

松沢1号型

戸塚山137号墳と同様に側壁各2枚の大形板石を、前後の壁は1枚石を配す。石棺内部は長径237 cm、最大幅120 cmと今まで述べて来た石棺形態よりも長径の比に対し幅をもち、上面プラン

での形状は120 cm×120 cmと120 cm×100 cmの正方形石棺を接合した形に近い特質をなす。

棺床は同じ石英粗面岩の板石を敷きつめた有礫床、蓋石も6枚を重ねた複石蓋である。

松沢2号型

1号箱式石棺より小規模であるが、基本的には同形態に近い。石英粗面岩の板石2枚を側壁に対互し、その上に小板石を横位に積んでいる。この工法は、横穴石室をもつ長手古墳、羽山古墳等の側壁に多くみられる特徴であり、堅穴石木郭の仲間としては特異な例である。両端壁は一枚石を用し、蓋石は複石蓋で、一部が「へ」の字形になっており切妻型の屋根状に蓋石を施していたと言う。⁽⁴⁾ 棺床は、板石による有礫床である。

第2表 組合式箱型石棺分類表

[長径×幅×深さ]

古墳名	所在地	墳丘	分類	計測値	出土遺物
戸塚山137号墳	米沢市上浅川	帆立貝式古墳	戸塚山137号型	150× 50×30	堅櫛3点 刃子1点
松沢1号墳		円墳	松沢1号型	237×120×45	土師器の埴
松沢2号墳	南陽市 松沢	円墳	松沢2号型	180× 82×47	
土矢倉1号墳	上山市 金谷	円墳	土矢倉1号型	280× 57×40	鉄製品片、小片、土師器片、須恵器片
土矢倉2号墳		前方後円墳		363× 66×66	鉄鏃破片、編物残片、同筒埴輪片、像形埴輪手部残片
土矢倉3号墳		円墳		200× 60×30	
谷柏1号墳	山形市 谷柏	円墳	去手呂2号型	(215×46)	土師器片、須恵器片、鉄釘らしきもの若干
谷柏2号墳		円墳	去手呂2号型	176× 38	
谷柏3号墳		円墳	谷柏3号型		
谷柏5号墳		円墳	根際型		
谷柏9号墳		円墳		190× 51×25	
谷柏14号墳		円墳	谷柏3号型		
谷柏15号墳		円墳	根際型		
菅沢1号墳	山形市 菅沢	円墳		200× 40	
大の越1号墳	山形市 門伝	円墳	大の越1号型	(160)×60×48	環頭大刀、鉄剣、鉄斧、刀子、胃残欠、のみ残片、直刀、鉄鏃、鉄釘、吊り金具、土師器、その他の鉄片
大の越2号墳		円墳	大の越2号型	282× 70×45	
去手路1号墳	山形市去手路	円墳	高原型	200× 57	
去手路2号墳		円墳	去手路2号型	198× 60	
高原古墳群	山形市 高原	円墳	高原型	256× 69×46	
お花山1号墳	山形市 青野	円墳	戸塚山137号型	150×36	
お花山2号墳		円墳		182×446×60	

根際古墳	山形市 根際	円	墳	根際型	166×42.5×33	人骨
原町古墳	天童市 原町	円	墳		150× 45×33	素焼の土器
高瀬山古墳	寒河江市高瀬山	円	墳	高原型	235× 33×57	
河島山古墳	村山市河島	円	墳	高原型	175×40×24~27	

3) 年 代

次に組合式石棺の年代について述べてみよう。類形した石棺の年代がどの位置にあてはめるかは、時期決定の分る遺物の出土がないだけに難しいが、県内最古の組み合わせ石棺は戸塚山 137 号墳と大の越 2 号石棺に位置付けられる。

先の戸塚山 137 号型石棺は袖状に側壁が張り出すのを特徴とするもので、高畠町、大師森山や鶴岡市、菱津の長持形石棺に類似する。川崎利夫氏によると菱津は 6 世紀、大師森山の石棺は 5 世紀末か 6 世紀初頭と推測している。⁽⁵⁾ 戸塚山 137 号墳は少なくとも大師森山の石棺よりも一段階古い。5 世紀後半～5 世紀末とみられ、5 世紀代に関東地方で盛行した長持石棺の影響を有する形態と考えたい。

後の大の越古墳は、1 号棺から南小泉Ⅱ式並行の埴が検出されており、5 世紀末～6 世紀初頭に位置付けられる。2 号棺は 1 号棺以前に築造されたことは言うまでもなく、5 世紀を下ることはない。⁽⁶⁾ 6 世紀の段階としては、土矢倉 1 号形がその代表と言える。その前半、松沢 1 号墳からは長頸埴の発見があり、⁽⁷⁾ 関東地区の鬼高期、東北地方の引田式に求められることから 6 世紀中葉の年代があたえられ、同 2 号型は形状からすると合掌形石棺の石棺が考えられる。合掌形を

有する石棺の分布は長野県、善光寺平のみに分布す

第 3 表山形県内の組合式箱型石棺の編年表

	村山地方	置賜地方
5 C 中		
後	大の越 2 号型	戸塚山 137 号型
前	大の越 1 号型	
6 C 中	土矢倉 1 号型	松沢 1 号型
後		松沢 2 号型
6 C 末	去手呂 2 号型	
}	谷柏 3 号型	横穴石室
7 C 中葉		
7 C 後半	高原型	横穴石室
}		
8 C 中葉	根際型	

る特異な形態であり、年代は 6 世紀前半から 8 世紀初頭までであるという。⁽⁸⁾ 墳丘は 15～20m 程度で、石積塚で構成している。この点、松沢 2 号墳と類似する。年代は合掌式古墳では最盛期である 6 世紀後半から同末期と考えておきたい。置賜盆地では、7 世紀初頭から 8 世紀末前半にかけて横穴式石室に変わる。⁽⁹⁾

しかし村山地方では、7 世紀に入っても横穴式石室は現出せず、竪穴式石室をもつ組合式石棺が占める。去手呂 2 号型や、谷柏 3 号型などの棺床に敷石をもち、小規模な石棺が 6 世紀末から 7 世紀代の代表と言うそうであり、より群集する傾向をもつ。

8 世紀に入っても置賜地方と同様に古墳築造は行なわれている。まれに須恵器墳、土師器墳の遺物が

ら相定し、高原型、根際型が代表といえる。特徴としては、棺床に板石を伴わない無礫床が多く、根際型が小規模に対し、高原型が大規模な要素をもつ。基本的には8世紀の範囲を加えたが、後者の高原型は7世紀初頭までのぼる可能性をもつ。

注

- (1) 伊東信雄・伊藤玄三 1964 「会津大塚山古墳」『会津若松史』別巻1
- (2) 仙台市教育委員会 1982 「遠見塚古墳発掘調査現地説明会資料」
- (3) 柏倉亮吉 1953 「山形県の古墳」『山形県文化財調査報告書』第4輯 山形県教育委員会
- (4) 佐藤鎮雄 1982 「置賜地方の古墳、南陽市周辺の古墳を中心として」『まんざり創刊号』まんざり会
- (5) 川崎利夫 1982 「置賜地方の古墳、方形周溝墓と大型古墳を中心として」『まんざり創刊号』まんざり会
- (6) 川崎利夫・野尻 侃 1979 「大之越古墳」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第18集 山形県教育委員会
- (7) 川崎利夫 1977 「出羽地域における古墳の成立」『考古学研究第24巻第2号』考古学研究会
- (8) 小林秀夫 1978 「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』
- (9) 佐藤鎮雄・尾形与典 1974 「清水前古墳群発掘調査概報」『山形県埋蔵文化財調査報告書』